特集　弘前大学附属図書館

今回の特集は、「弘前大学附属図書館」と題して、図書館をご利用頂いております、名誉教授の品川先生に「外からみた弘前大学附属図書館」、また、夜間アルバイトで勤務しております３名の学生に「内側からみた弘前大学図書館」と称して原稿を頂きました。

外から見た弘前大学図書館

弘前大学名誉教授　品川　信良

標記の題でこの度、何かを書くようにと、依頼されましたが、いささか戸まどっています。その理由は２つございます。その第１は、「外から」ということの意味です。それは、「学外者」または「部外者」という意味らしいのですが、さて私のような弘前大学定年退職後の者は、現職の方からみれば、外の部外者かも知れませんが、学外の一般市民などからみれば、立派な「部内者」でもあるからです。その何よりの証拠に、「図書館利用証」を交付して頂きさえすれば、定年後も自由に、現職時代と同じように、弘前大学図書館を利用できるからです。

もう１つの理由は、弘前大学には図書館が、実は２つあるからです。文京町キャンパスの、旧制弘前高校以来の「本館」のほかにもう一つ、本町キャンパスには、「医学部分館」があるからです。言うまでもなく、私が年来深く関わってきたのは後者でした。従って、本館と医学部分館のどちらについての意見や感想を述べればよいのかにも、私はいささか戸まどっています。

そんなことを考えているうちにも、与えられた字数は段々少なくなってゆきますので、日頃何となく考えていることの幾つかを、次に述べさせて頂きます。

その第１は、近年とみに弘前大学図書館はいよいよ整備され、特に一般市民などにも広く利用され始めていることかと思います。但し医学部分館のほうは、医学部の建物のなかの、やや奥まった分かりにくいところにあるせいもあってか、一般市民の利用者は、本館よりはまだ少ないようです。また医学部分館の閲覧室は、本館に較べれば、非常に手狭なことも、医学部分館が利用されにくくなっている、もう１つの理由かと思います。

第２に申しあげたいことは、利用者のなかには、マナーの余り良くない方が、決して少なくないことです。特に問題なのは、若い学生の利用者です。固いカカトのハイヒールなどの靴をはいて、足音高く入ってくる。そしてドサッと鞄をテーブルの上におろし、その中から書籍やノートやコピー用紙などを取り出したかと思うと、紙音高くめくり続ける若者、特にそういう女子学生が、近年特に多くなってきているように思います。従って図書館内には、「禁煙」や「飲食禁止」などのほかに、「静粛」という張り紙なども必要かと思います。

それからもう１つ申しあげるならば、本館の閲覧室入り口などにはいささか、「太宰治色」が強すぎはしまいかと思います。確かに太宰治氏は旧制弘前高校および青森県が生んだ偉大な文学者であり、優れた作家ではあります。また津軽の名門の出でもありますし、旧制弘高時代は模範生であったかも知れません。しかしその生涯には、色々問題無しとは致しません。従って彼を讃え、彼に関する何かを陳列するとしても、もう少し控え目に、奥まった所にするとか、その期限を限るとかしてはいかがなものでしょうか。

そしてその代わりに、現職の方々や、最近お辞めになられたばかりの方々の御著書や業績などを、もっと目立つところに陳列されては如何なものでしょうか。学内各学部などからの刊行物や、太宰治氏以外の弘前大学関係者の出版物などが、奥

まった所に押しこめられてばかり居るというのも問題かと思います。

更にもう１つ申しあげるならば、本館や文京町キャンパスの図書や出版関係の情報が、もっと医学部・本町キャンパスにも流れるように、またその逆も、もっと行われるようにできないものでしょうか。

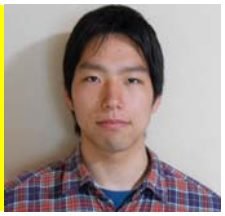
と言うのは、現職時代に私自身、本館に出入りしたことは殆んどありませんでしたので、文京町キャンパスの方々の御業績などについては、私は余り存じあげませんでした。その私が定年退職後は、わが家が文京町キャンパスに近いせいもあって、医学部分館よりも足しげく本館にお邪魔するようになり、その本館に所蔵されている、旧制弘高時代以来の、多彩豊富な数多くの資料のほかに、まことに多彩な内外の、数多くの新刊書などにも、私は魅了されつづけているからです。

色々、失礼なことを申しあげましたが、今後とも、呉々もよろしくお願い致します。

（しながわ　のぶよし）

図書館カウンターの内側から見えるもの

農学生命科学部４年　櫛引　高志



私は弘前大学附属図書館文京地区で図書館アルバイトをさせていただいて３年目になります。主な業務といたしましては図書の貸出返却作業、書架や新聞の整理、図書の請求依頼の受付、閉館作業などを行うカウンター業務です。また、土曜日や日曜日などのシフトに入った際には図書館の開館作業も行っており、図書館の管理業務に携わっています。今回はこうした業務を通じて私が感じたことを書かせていただきたいと思います。

大学図書館は平日 9：00～22：00、土曜日、日曜日は 10：00～17：00 まで開館しています。図書館を利用される方の利用で多いものは文献の探索、過去の新聞の請求などの資料請求です。私自身は図書館にはレポートの作成に必要となる資料を探すためや試験勉強するために利用しています。また、閉館時間ぎりぎりまで試験の勉強、レポートの作成、公務員試験や教員採用試験の対策などをされる方が多数いらっしゃいます。

こうした図書館を利用される方が利用しやすい空間にできるように私自身心がけて業務に当たるようにしております。大学図書館を利用される方は本校の学生だけでなく、一般の市民の方や他大学の大学生の方たちもいらっしゃいます。利用者の年齢層は広く、高校生からご年配の方までと図書館では老若男女を問わず利用される方たちが多くいらっしゃいます。これは大学の図書館に限った事ではないかもしれませんが多くの方が図書館に足を運び、学ぶという点において年齢差というものは感じられず、学問に真摯に向き合う姿勢を見て私自身も頑張ろうと思いいつも励まされています。

今年大学図書館は長期にわたる改修工事が行われます。これまでも図書館ではパソコンルームの新設工事や文庫･新書コーナー、ラーニングスペース・スクエアの設置工事などを行いました。パソコンルームの新設によりパソコンの台数が増加し、利用される方も増え、資料の調査なども行いやすくなりました。また、ラーニングスペース・スクエアができたことにより学生の方の自習スペースはさらに増え、学生同士の討論、会議、ゼミナールなどが行うことができる場所ができたことによって図書館が情報サービスを提供するという役割だけではなく、コミュニケーションをとれる場所としての役割も果たしていると思いました。

３年間のカウンター業務を通して得られた経験は私自身にとって大きな糧となり、貴重な体験をすることができました。今後も大学図書館が利用者の方々にとって必要となる役割を果たしていくことを願っています。

（くしびき　たかし）

図書館カウンター業務に就いて感じたこと

教育学部３年　原口　恭史郎

私は去年から図書館業務の勤務につき、今年で２年目となります。そこで、去年１年間図書館勤務者として感じたことを書かせていただきます。そのためには、まず利用者としての視点から述べていきたいと思います。

学生利用者として、本図書館は数多くの図書を読んだり、パソコンを使ったり、閉館前まで勉強をしたり調べたり、印刷をしたりする場であります。授業や課題などの調査や学習で、図書やパソコンは必須です。勉強をするのにも、周囲も勉強をする意欲を持って図書館に来ているので、自身もやる気を促されます。相乗効果、切磋琢磨といった関係でしょうか。言うなれば本図書館は学生にとって必要不可欠な学びの場と言えるでしょう。

図書館に対してこのような利用者としての視点から、勤務者としての視点になると、利用者としての視点の一つ先を見つめられるようになりました。それについて述べます。

勤務者の業務の重要な目的は利用者の環境整備です。利用者は色んな方がいます。本をきれいに本棚に戻す人、使い終わった後のイスを整える人、消しゴムの削りカスを律儀にゴミ箱に捨てる人などもいます。また、忙しい人もいるのでしょう、それらの逆の人もいれば館内で飲食をしたり、パソコンの電源をつけたままで帰ったりしてしまう人もいます。

こういった様々な人が利用する環境を整え、使いやすい状態にすることが私たち勤務者の勤めです。そのため、掃除したり、本棚の本の並びを整理したり、イスを整えています。また、図書は大切で、多くの人も利用するので本を汚したり、返却期限を延滞したり、図書を汚す恐れがある館内での飲食などに対しては厳しく注意をする立場であります。本図書館の環境はこれらのように多くの配慮によって維持されています。これは図書館利用者の使いやすさを求めたものであり、やりがいでもあります。

また、図書館のカウンターは人と接する重要な場であることをそこで働く立場になって強く実感しました。私がまだ一学年で図書館を利用していた時、知り合いだった先輩が働いている姿をよく見かけました。その先輩はいつも明るく気さくな方で、図書の貸出・返却の際に軽い挨拶を交わすのが心地よいものでした。そこで、私も明るく、笑顔に応対するように心がけています。利用者の人から「ありがとう」と言ってもらえるとやはり嬉しいものです。このように本図書館は勤務者と利用者とのコミュニケーションがあり、学生にとって身近な存在だと考えています。

本図書館は無論学生勤務者だけでなく、職員、大学法人、利用者など多くの人に支えられて利用者が身近で使いやすい環境を保たれています。私は今年もまた勉学の場としてだけでなく、やりがいのある勤務の場として図書館に携わっていきたいです。

（はらぐち　きょうしろう）

利用者のあたたかさにふれて

医学部３年　佐藤　このみ

私は、附属図書館医学部分館でアルバイトを始めて２年目になりました。休日の開館準備、本の貸し出しや返却などのカウンター業務、閉館時の片づけが主な仕事です。図書館は、本の貸し出しだけではなく、自習のために通う方も多くいるため、接客業ではありますが、コンビニや飲食店ほ

ど人と関わることはない仕事かもしれません。しかし、カウンター業務をしていて、何度も利用者のあたたかさにふれることができました。まだ私が勤務したての新人だった頃のことです。閉館直前に、貸し出しの方が多く訪れ、カウンターに列ができてしまいました。まだ機械の操作に慣れていなくてあたふたしながら焦っている私に、利用者の方々は「ゆっくりやっていいよ。」「時間あるから大丈夫だよ。」と、温かい声をかけていただきました。ただ見守って待っていてもらえるだけでなく、温かい言葉をかけていただけて、とても安心しました。また、１年経ち、業務にも慣れてから、閉館の予鈴がなった時に、文献が見つからないから手伝ってほしいと声をかけられたことがありました。本のあるべき場所にはなかったため、あきらめかけながら探し、なんとか見つけることができました。すると、次の勤務の時にその方とまたお会いすると、「この間は時間だったのに本を見つけてくれてありがとう。」と、声をかけていただきました。小さなことでも覚えていてくれて声をかけていただけて、とても心が温かくなりました。わたしは週２日の勤務ですが、毎日のように図書館へ通っている方とは、今ではもうお互いに顔を覚えているように感じます。また、利用者だけではなく、図書館の鍵を管理してくれている警備室に鍵を返しに行くと、いつも警備員さんが「夏休みは帰省したかい？」「今日は寒いから風邪を引かないでね。」と、必ず声をかけてくれます。そんな温かい人に囲まれて図書館で働くことができて、わたしは幸せです。アルバイトをするまでは、図書館は静かで厳粛なイメージでしたが、実際にはもっと気軽に足を運べる場所だったように感じます。これからも、多くの人に図書館を利用してほしいと思います。

（さとう　このみ）

本との出会いを楽しむ 第11回

ミステリーを楽しむ

被ばく医療総合研究所教授　柏倉　幾郎

これまでの読書歴を振り返ると、自分は乱読ばりに随分と色々な本を読んできた事を改めて認識しました。その割に余り身になっていないのが問題ではありますが。幼い頃は自宅にあった子供向けの文学全集を繰り返し読んだ記憶があります。そうした中で鮮烈な印象を受けたのが、小学５年生の時図書室から借りて読んだコナン・ドイル著「バスカヴィル家の犬」です。シャーロック・ホームズが登場する推理小説に目覚め、中学に入ると図書室にあった江戸川乱歩シリーズ「怪人二十面相/明智小五郎/少年探偵団」にはまり、その後今に至るまでのミステリーファンです。

浪人時代は、予備校までの片道１時間のバス通の合間に受験対策も兼ね明治以降の日本文学の有名どころはほぼ読破し（受験には役に立ちませんでしたが）、大学時代は海外の推理小説の名作や横溝正史著の「金田一耕助」シリーズを読み漁りました。社会人となってからは、江戸川乱歩賞受賞作や年末に発表される週刊文春の「ミステリーベスト 10」が、毎年の年末年始の楽しみとなりました。私の場合、その本の世界に没入し、先に読み進みたいがこの時間が終わって欲しくないような矛盾した感覚に囚われる本との出会いが最高です。面白い本は多いのですが、そういった世界にまで誘ってくれる本にはなかなか出会う事が出来ません。最近読んだスティーグ・ラーソン著「ミレニアム」は久々の至福の時間となりました。彼の作品は初めてでしたが、既に故人となっていたのが残念です。

また、歴史に興味があるので、史実をもとに作家独自の仮説で物語が展開する作品も好んで読んできました。契機となった作品の１つが高橋克彦著「写楽殺人事件」でしょうか。触発され、他の作家らによる写楽〇〇説も随分と楽しみました。